

福井県立博物館所蔵『馬威図』にみられる建築

—福井城下の視的考察 その23—

伊豆蔵 庫 喜*

A study on the building in the book 'UMAODOSHI-BYOBU' of the Fukui Prefecture Museum

— The sight of the Fukui castle town, part 23 —

Kouki Izukura

This paper deals with the appearance of the historic architectures, whose pictures are seen in the 'UMAODOSHI-BYOBU' owned by the Fukui Prefecture Museum. I clarify that architectures, such as 'Honmachi-Street' and 'Hyakuken-Bori' shows the reality of the Edo period. The picture of the roof of the building expressed the difference between the materials and tile work in detail.

1. はじめに

前稿では、福井市立郷土歴史博物館所蔵の『安政時代馬威し図』¹⁾にみられる建築について報告した²⁾。これは、昭和期に描かれた屏風絵であるが、桜御門や鉄御門および九十九橋などの位置関係は幕末の城下図と一致しており、かなり実景に近い様子を描いていること、建物の屋根も材料や葺き方の違いを克明に描き分けていることなどを指摘した。

本稿は、同じ馬威しの様子を描いている福井県立博物館所蔵の『馬威図』³⁾にみられる建築の様子や位置関係を考察し、既報の『安政時代馬威し図』と比較・検討してみたい。

2. 『馬威図』について

馬威しは、毎年正月14日に左義長神事として行われ、馬に乗った藩士が桜御門から城外に乗り出し、本町・呉服町を疾駆しながら柳御門を入れて城内に戻る福井藩の年中行事であった⁴⁾。

県立博物館所蔵の『馬威図』(図1)は六曲一双の屏風で、右隻に九十九橋北詰めから桜御門までの本町通りを中心にした町人地の町並みが、左隻に桜御門から百間堀までの武家地の様子が描かれている。

図の大きさは、左隻・右隻ともに高さは1555mm、長さは3478mmである。作者や年代は不明であるが、堀などの顔料は幕末以降に輸入されたものは使われてないことから⁵⁾、それ以前に作成された屏風と考えられる。馬威しの華やいだ雰囲気や民衆の表情はよく描かれているが、城下周辺の様子や個々の建物の位置についてはやや正確性に欠ける。例えば、右隻の照手門後方の九十九橋や対岸(橋南)は描かれてなく、足羽川は霞がかかった様に表されていたり、左隻の第四扇から第六扇の百間堀は極端に湾曲し、城下東端の荒川や鳩御門などもみられない。この他、後述するように福井城内の建物や武家屋敷の位置関係も城下図と一致しない点が多くみられる。

* 建設工学科 建築学専攻

図1『馬威図』(右隻)

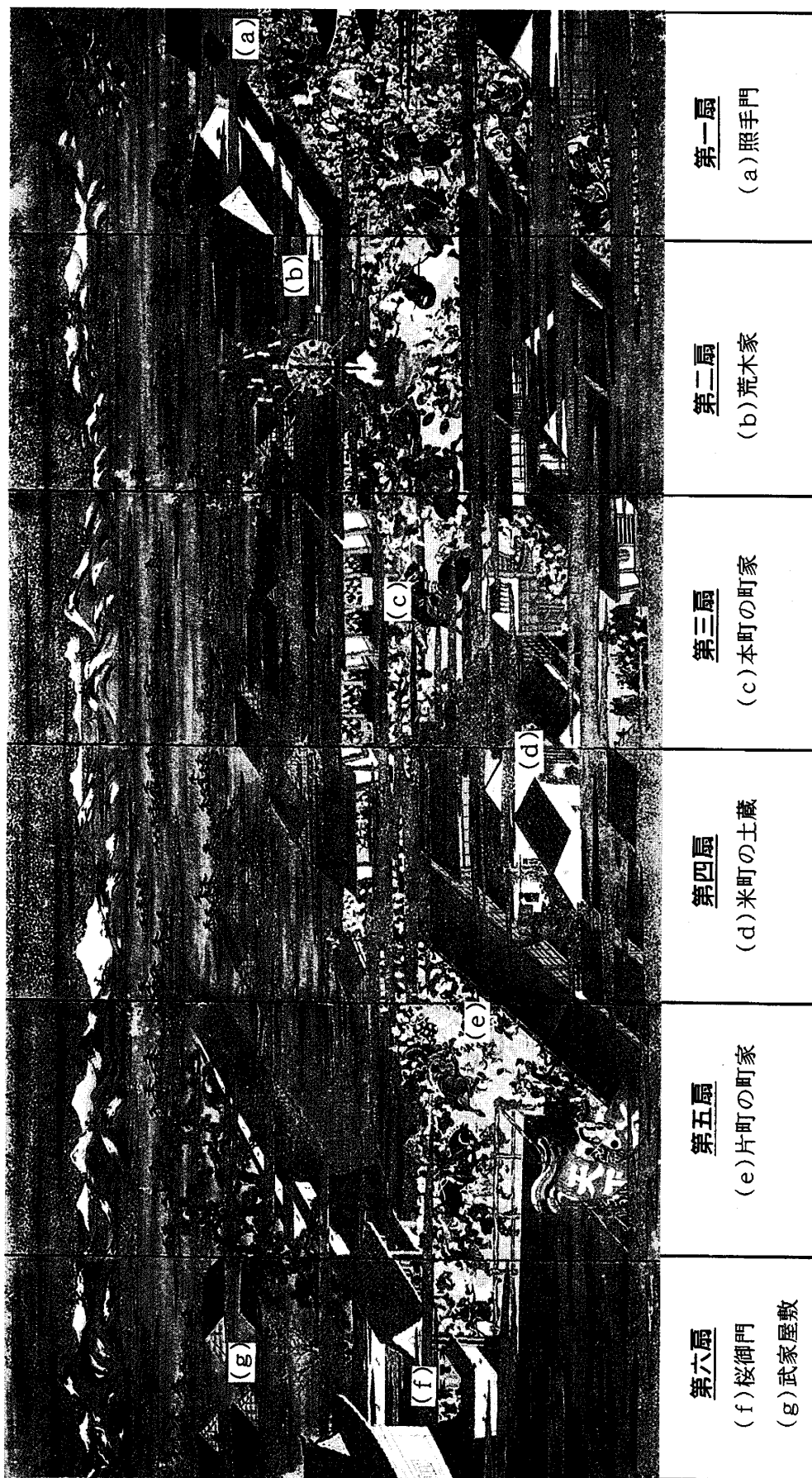
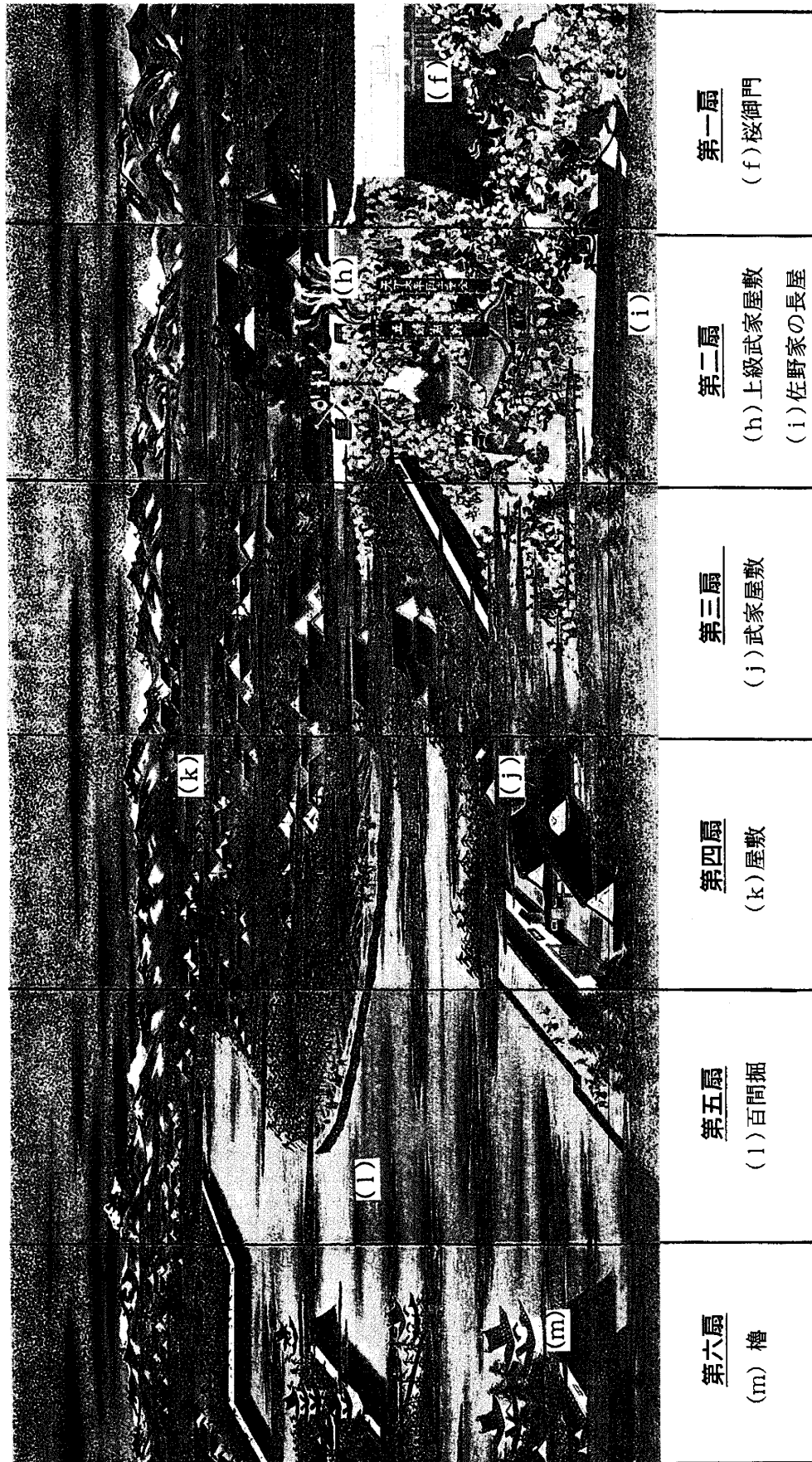


図1 『馬威図』(左隻)



3. 『馬威図』にみられる建物について

右隻・左隻の順に一扇ごとに描かれている建築について検討してみたい。右隻・左隻とも右から左へ順に第一扇から第六扇までとする。

(1) 右隻

イ. 第一・二扇

第一扇は九十九橋の北詰めの様子が描かれている。ここは北陸街道と本町通りが交差する位置で、高札場も置かれ、城下の交通の要所であった。

画面の上方に九十九橋北詰めにあった照手門(a)がみられるが、その南に続く九十九橋は描かれていない。照手門の東側(左手)の大きな屋敷は荒木家(b)である。当家は福井藩の藩札発行の札所元締めを勤めた旧家で⁶⁾、通りに面して2階建ての長屋と土蔵が並んでいる。屋根は長屋が入母屋造で、土蔵は切妻造である。いずれも茶褐色⁷⁾で彩色され、よこ方向に波線が入っている。そして、土蔵の棟は灰色がかった青色(以下、灰青色とする)で表現されている。外壁は長屋、土蔵ともに白壁で、長屋の2階には格子窓が付いている。

ロ. 第三・四扇

二扇目から四扇目の中ほどにみられる通りは、本町通りである。通りの中央には左義長飾りが設けられている。その周りに鉦や旗をもって馬を威している多くの町人や農民がみられ、町家の2階の窓から見物している人々もいる。

本町通りに面して並んでいる町家(c)の形式は、すべて切妻造・平入りである。屋根は隣家と軒を接し、青緑色で格子状のものがたて・よこに重なるように描かれている。棟は荒木家の土蔵と同様、灰青色である。2階は階高が低い厨子二階で、壁面はほとんどが真壁、両端には袖壁が付いている。間口はほとんどが3間前後とみられる。同じ町家でも、先の荒木家とは大きく違っている。

本町通りの北筋(手前)は、米町通りで山口家や内藤家などの米問屋が集まっている。山口家は文政頃(1818~1829)に3万両の財産があったといわれ、当時の福井城下における有数の豪商であった。同じ頃の福井藩の年間収入は約2万5千石であり⁸⁾、当家の財力がいかに大きなものであったかがわかる。

三・四扇目の下方にみられる土蔵(d)は、山口家などの米蔵であろう。屋根は暗い灰色(暗灰色)の切妻造で、よこ波線が入り、鬼瓦も描かれている。外壁は1・2階ともに白壁で、2階に窓が付いているものもある。

ハ. 第五・六扇

五扇目中央から六扇目下方に延びている堀は、町人地と武家地を分ける福井城西側の4重目の堀である。

堀沿いの通りの西側は、片町(片側町)でやはり町家(e)が並んでいる。屋根の色や形式は、上記の本町通り沿いの町家とほぼ同じである。これらの町家の表構えは明らかでないが、裏側は板張りであったことがわかる。

第六扇下方、堀の東に桜御門(f)があり、表門と櫓門の一部が描かれている。桜御門は平屋建ての表門と、2階建ての櫓門からなる桁形門であった。表門は中央に両開きの扉が付き、両脇は石垣積みである。屋根は灰青色でたて・よこに太線が入り、軒先には軒丸瓦が描かれている。桜御門の南(右手)に延びる石垣の上には白壁の土塀が建ち、その後方には松が植えられている。土塀の屋根も、表門と同じ灰青色である。

六扇目、中ほどには武家屋敷と思われる建物が4棟みられる(g)。4棟とも屋根は切妻造、色は暗い赤色(暗赤色)で、よこに細かい破線が入っている。妻面は東と貫をたて・よこに組合せ、中を板張りとしている。先の本町や片町通り沿いに並ぶ町家の景観とは明らかに異なっている。

(2)左隻

イ. 第一・二扇

左隻の第一扇中央の櫓門は、右隻から続いている桜御門である。櫓門の屋根は入母屋造で、軒丸瓦も表されている。色はやはり灰青色で、たてとよこに太線が入っている。2階の外壁は白壁で、壁面に武者窓が付いている。1階は中央が門口で、脇は石垣積みである。

一扇目と二扇目は桜御門の内側の様子が描かれ、唐破風屋根の太鼓小屋や左義長飾りが設けられている。門内に多くの民衆がみられるのは、馬威し当日は町人や農民の入城が許されていたためである。

桜御門の後方、通りの南側は上級武家屋敷と思われるが、具体的な屋敷名は分からない⁹⁾。正面の屋敷(h)は、通りに沿って2階建ての長屋門を構えている。屋根は切妻造、色は暗赤色でよこ方向に破線が入っている。棟は灰青色で、端の小口は黒色である。外壁は白壁で、上部に格子窓が並び、下部は下見板張りになっている。

長屋の奥は御殿であろう。御殿の屋根は入母屋造で、色は長屋と同じ暗赤色である。棟の灰青色と小口の黒色も同じである。妻面は懸魚が付き、外壁は白壁であり、先の武家屋敷(g)の板張りとは比べると上質と考えられる。

二扇目下端、入母屋造の茶褐色屋根は上級武家の佐野屋敷の長屋(i)と思われる。この佐野家は桜御門内にあつて、馬威しの際には長屋の2階が藩主の席に宛てられていた¹⁰⁾。

ロ. 第三・四扇

第三扇と第四扇にみられるのは、桜御門の東側から百間堀までの間にあつた武家屋敷(j)である。屋敷の周囲には長屋や塀が廻り、その内側に御殿がみられる。御殿の屋根は入母屋造や切妻造など様々であるが、色はすべて暗赤色である。ただし、城下図に照し合せても具体的に誰の屋敷であるかは特定できない。

第三・四扇の上部にも屋敷(k)が集中している。四扇目中ほどから五扇目にかけての堀が湾曲した東側辺りは、中の馬場と思われる。ここは、中・下級武家屋敷地であり、屏風の屋根はこれらを示していると考えられる。しかし、この一画は広い範囲を凝縮して描かれているために、勝見周辺の町家も含んでいる可能性もある。屋敷(k)の屋根は明るい灰色(明灰色)で、たて方向に

黄緑色の細線が入っている。そして、棟には茅などを厚く重ねたような表現がされている例も数棟みられる。

八. 第五・六扇

第五扇と第六扇の大半は百間掘(1)である。幅 40~50 間の広大な堀の様子や低い土手が湾曲した東詰め、石垣が積まれている西詰めの形状がよく分かる。

六扇目には6棟の檼(m)がみられる。5棟は二重で、1棟は三重の檼である。二重の檼は南二ノ丸の隅檼、三重の檼は本丸の巽檼と思われるが、位置は正確ではない。これらの檼の屋根はいずれも灰青色で、たて・よこの太線が示されている。そして、屋根の両端には鯪もみられる。

4. 『馬威図』の屋根表現について

『馬威図』にみられる建物の屋根表現をみると、色は茶褐色(ダークレッシュブラウン)・灰青色(グレイッシュブルー)・青緑色(ダークブルーグリーン)・暗灰色(チャコールグレイ)・明灰色(スレートグレイ)・暗赤色(ダークレッド)の6種類ある。描法はたてとよこの実線やよこの波線あるいはよこの破線がみられたり、軒先に軒丸瓦があるもの、小口が黒く塗られているものなどに分けられる。これらの表現の違いは、屋根の材料や葺き方の差異を示唆していると考えられる。

茶褐色の屋根は、上級武家の佐野家長屋や豪商荒木家の主屋にみられる¹¹⁾。この茶褐色は『福井城旧景』の本丸御殿などにみられたように、越前特有の赤瓦¹²⁾を表しているものと考えられる。そして、よこ波線は棧瓦の曲線を示したものと思われ、『馬威図』の茶褐色で、よこ波線入りの屋根は、赤瓦の棧瓦葺き(図2)とみてよい。

桜御門や南二ノ丸隅檼の屋根は、灰青色が塗られている。このうち桜御門の屋根は、笏谷石¹³⁾製の瓦であったことが明らかであり¹⁴⁾、たてとよこの太線が書き込まれている南二ノ丸隅檼の屋根は、明治期の古写真¹⁵⁾によると本瓦葺きと確認できる。したがって、灰青色、たて・よこ太線入りの屋根は、笏谷石瓦の本瓦葺き(図3)と判断できる。なお、本町や片町通り沿いの町家の棟も灰青色で示されているが、これは笏谷石の棟石であろう。

青緑色の屋根は、本町・片町通り沿いの町家に多くみられる。これまでみてきたように『福井城旧景』や『安政時代馬威し図』に描かれている町家はほとんどが板葺きであるから¹⁶⁾、青緑色屋根も板葺き(図4)を示していると思われる。

米町の土蔵の屋根は、暗灰色でよこ波線が入っている。棟には棟石や鬼瓦がみられ、よこ波線は前述したように棧瓦葺きを表している。そして、土蔵の屋根は土瓦が一般的であるから、暗灰色でよこ波線入りの屋根は、土瓦の棧瓦葺き(図5)と考えたい。

この他に『馬威図』では、明灰色の屋根が、城下東南部(左隻・左上部)に集中してみられる。そして、黄緑色の細線がたて方向に入っているなかには、棟を茅でおさえた茅棟とみられるものもある。つまり、明灰色の屋根は茅葺き(図6)と考えられる。

暗赤色の屋根は、上級武家屋敷の御殿や長屋にみられる。この暗赤色は、色合いからみて檜皮か柿などの植物性の材料を表していると判断できる(図7)。そして、暗赤色屋根には細かいよこ

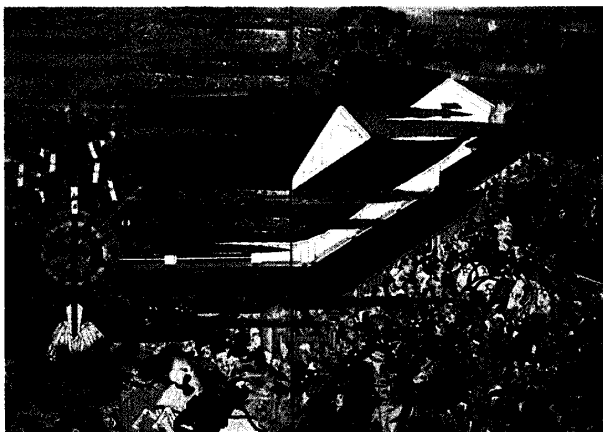


図2 赤瓦葺き

荒木家の屋根（茶褐色・よこ波線入り）

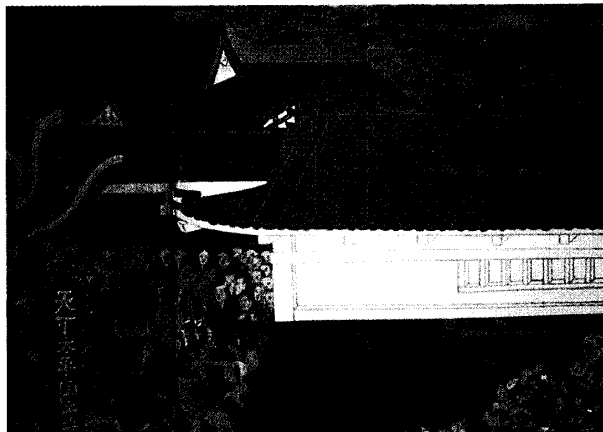


図3 石瓦葺き(笏谷石)

桜御門の屋根（灰青色・たて、よこ太線入り）



図4 板葺き

本町の町家の屋根（青緑色・板の表現あり）

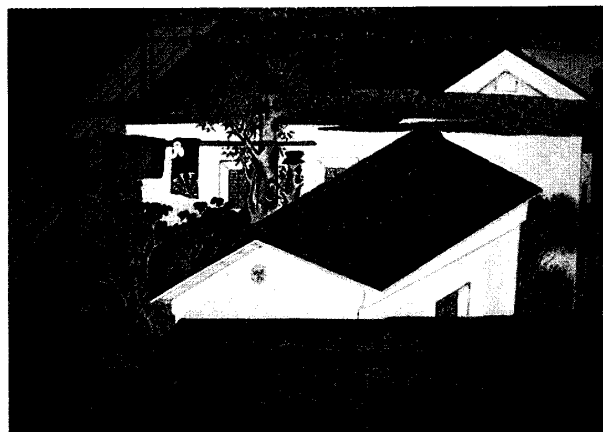


図5 土瓦葺き

米町の土蔵の屋根（暗灰色・よこ波線入り）



図6 茅葺き

屋敷の屋根（明灰色・黄緑色のたて細線入り）



図7 檜皮葺きもしくは柿葺き

上級武家屋敷の屋根（暗赤色・よこ破線入り）

（図2～7は『馬威図』より）

破線が入っていたり、小口が黒く塗られているものもある。

以上、『馬威図』にみられる建物の屋根表現を分類すると、表1になる。

表1 『馬威図』にみられる建築の屋根表現

色別	屋根材 ¹⁾	描法	葺き方	建築名			備考
				城地	武家地	町人地	
茶褐色	赤瓦	よこ(波線) 棟石・鬼瓦あり	棧瓦葺き		佐野家の長屋(i)	照手門(a) 荒木家の(b)の長屋・土蔵	
灰青色	石瓦(笏石)	たて・よこ(太線) 鬼瓦・軒丸瓦あり	本瓦葺き	桜御門(f)の表門 櫓門 南二ノ丸隅櫓(m)、廻櫓		荒木家の土蔵棟石(b) 本町・片町の町家(棟石)	史料で笏石瓦製とある 古写真で本瓦葺きか確認 できる
青緑色	板	板の表現	板葺き			本町通りの町家(c) 片町通りの町家(e)	
暗灰色	土瓦	よこ(波線) 棟石・鬼瓦あり	棧瓦葺き			山口家の土蔵(d)	
明灰色	茅	黄緑色(細線) 茅葺の表現	茅葺き		屋敷(k)		
暗赤色	檜皮もしくは 柿	よこ(破線) 小口が黒色・棟石あり	檜皮葺きもしくは 柿葺き		武家屋敷(h・j) 武家屋敷(g)		

¹⁾ : 日本色研(株) 『配色カード29 a』によると、茶褐色=グーリデューブロン(dk4)・灰青色=グレイッシュブルー(g16)・青緑色=グーカブルグリーン(dk14)・暗灰色=ネーブルグレイ(dkGy2.4)・明灰色=スートグレイ(dkGy3.5)・暗赤色=グーレット(dk2)で色別される

5. おわりに

以上、福井県立博物館所蔵の『馬威図』にみられる福井城下の建物について検討した。この絵は幕末頃に描かれた屏風絵で、本町通りや百間堀などの位置関係は幕末の城下図とほぼ一致している。しかし、桜御門内の上級武家屋敷は曖昧で具体的な屋敷名は比定できず、城下周辺部の屋敷などは武家屋敷か町家かさえ判断できない。

一方、建物の屋根表現は、材料や葺き方の違いを克明に描き分けられていて、その表現や描法もこれまでの『福井城旧景』や『安政時代馬威し図』に近いものである。すなわち、『馬威図』は実景を忠実に描いたものとは言いがたく絵画的要素が強いが、幕末期の福井城下の景観を知る上で貴重な絵図史料といえる。

また、前稿で報告した福井市立郷土歴史博物館所蔵の『安政時代馬威し図』と比較すると、『馬威図』には『安政時代馬威し図』にはなかった百間堀際の隅櫓や城下東端の屋敷が描かれている。そして、『安政時代馬威し図』の桜御門内の各上級武家屋敷の名称や位置関係は城下図とほぼ一致しているが、『馬威図』の武家屋敷は点在しているだけで屋敷名や正確な位置は特定できない。さらに、本町通り沿いの町家は、前者では石置き屋根であったのに、この図では置石はなく、軒の腕木や下屋庇なども省略されている。しかし、屋根の色彩や描法については、両図ともほとんど同じであった。

謝辞：『馬威図』の閲覧ならびに撮影に際しては、福井県立博物館の協力を戴きました。末尾ながら感謝申し上げます。

【註】

- 1) 福井市立郷土歴史博物館所蔵 『春嶽公記念文庫』
- 2) 拙稿「福井市立郷土歴史博物館所蔵『馬威し図』にみられる建築」福井工業大学研究紀要 第32号(2002.3)
- 3) 福井県立博物館所蔵
- 4) 森恒救『福井藩史話(上)』歴史図書社(1975.10) p196 の左義長・馬威の模様(一)の項
- 5) 『夢楽洞万司の世界』福井県立図書館(1996.4) p133
- 6) 『稿本福井市史(上)』歴史図書社(1973.1) p657 の札所の元締と役員の項に「藩札は札所にて発行し、荒木、駒屋の両家も戸締りせり」とある。
- 7) 屋根の色分けは、日本色研事業(株)『配色カード129a』を参考にした。
- 8) 舟沢茂樹『福井城下ものがたり』福井PRセンター(1944.4) p45 の福井城下の豪商の項
- 9) 屋敷の位置関係は、文化3年(1806)や慶応年間(1865~1867)の『福井御城下絵図』(松平宗紀氏所蔵『松平文庫』福井県立図書館保管)と照し合せた。
- 10) 註4掲載、『福井藩史話(上)』 p200 の左義長・馬威の模様(三)の項
- 11) 註1掲載、『安政時代馬威し図』に描かれている上級武家の佐野家長屋や豪商荒木家の主屋の屋根の色彩も、同じ茶褐色で塗られている。
- 12) 赤瓦とは、瓦の表面に酸化鉄(紅柄)溶液を塗布して焼成するため、茶褐色あるいは暗赤褐色している瓦を指す。この赤瓦は越前特有のものである。
- 13) 笏谷石は、足羽川から切り出される青みかかった凝灰岩である。笏谷石は越前特有のもので、現存する丸岡城天守は笏谷石の瓦が使われている。
- 14) 註4掲載、『福井藩史話(上)』 p196 に「大馬出の門は左右に土居にて植込樹木中に桜の古木ありしより一名桜の門と呼び、小馬出し門は左右の土居に柳を植込ありしより一名柳門と呼び、いずれも二重の門にて、屋根は福井城の如く笏谷石の石瓦を用いて壮嚴堅固を極めた」とある。
- 15) 舟沢茂樹・松原信之共著編『ふるさとの思い出写真集 明治・大正・昭和 福井』歴史図書社(1979.1) p9 参照
- 16) 『福井城旧景』と『安政時代馬威し図』の屋根表現については、伊豆蔵庫喜・吉田純一「『福井城旧景』にみられる建物の屋根表現」日本建築学会北陸支部研究報告集44号(2001.7)と、註2掲載の「福井市立郷土歴史博物館所蔵『馬威し図』にみられる建築」で詳しく報告している。

(平成14年11月28日受理)